

神戸大学大学院経営学研究科長 國部克彦 弔辞

加護野先生。先生がお亡くなりなられてから、早や、半年以上がたちまちした。その間、私は、先生が私たち経営学研究科、経営学部の後進の者たちに残してくださった、お教えがあったのか、ずっと考えて参りました。

私が、神戸大学経営学部に赴任した 1990 年代、先生はまだ 40 代で、経営学部の看板教授として、縦横無尽に活躍されておられました。「行け行けどんどん」というのが、当時の経営学部の合言葉のようで、次々と新しいプロジェクトが立ち上がり、その中心にはいつも加護野先生がいらっしゃいました。

その当時、加護野先生は、関西の 3 番手ではどうしようもない、とよくおっしゃっていたと記憶しています。世界と伍していくためには、1 番でなければならないというのが持論でした。これは神戸大学としては、近くに京都大学や大阪大学があるため、厳しい状況にありますが、経営学部や経営学研究科、そして経済学研究科や法学研究科を含めた神戸大学六甲台地区の社会科学系部局は常に一番でなければならないというのが先生の持論でした。

そして、先生は、その実現のために奔走されておられました。神戸大学が全国に先駆けて、「働きながら学べる」社会人 MBA を開設できたのは、その大きな功績の一つです。そして、加護野先生たちが中心となって確立された神戸方式とよばれる MBA の教育方式は、今や業界標準のひとつとなっています。

加護野先生の構想はそれだけにとどまらず、六甲台部局の将来にも及びました。神戸高等商業学校、神戸商業大学の歴史と伝統を持つ、神戸大学社会科学系部局が、いかにして一番の地位を維持して生き残れるのか。それは、現在も、私たち神戸大学六甲台部局の共通にして最大の課題です。

それに対する加護野先生の回答は明確で、六甲台部局の神戸大学からの独立しかないというものでした。さらに、国立大学から私立大学に移管せよということまで主張されました。実際、六甲台の独立については、研究会まで立ち上げて検討されていたようですが、加護野先生は経営学研究科長退任直後に病に倒れられ、ご自身がその先頭に立って陣頭指揮をとって頂くことはかないませんでした。

それからもうかなりの時を経えておりますが、国立大学はもとより、神戸大学を取り巻く状況は、当時とは比べものにならないほど厳しさを増しております。いまこそ、六甲台を独立させなければ、少なくとも独立させるくらいの気概をもってこの難局に挑まなければ、国立大

学を取り巻く大きな荒波に飲み込まれてしまうことは避けられません。

このような重大な岐路に立つ私たちが、加護野先生という指針を失ったことは大きな損失ですが、加護野先生が残してくださった教えは常に大変明確です。「日本一、世界一の経営学の研究教育拠点を目指して進化し続けること」。これが、加護野先生が私たちに遺してくださったお教えとして受け止め、先生からのご指導だけでなく、先生のお人柄そのものを経営学研究科の文化として受け継いで行くことを、改めて先生の前でお誓いし、経営学研究科長としての追悼の言葉とさせていただきます。

加護野先生、これまで長い間、本当にありがとうございました。先生の精神はいつまでも受け継いで参ります。